イギリス文学史　講義１　レポート

1U220790-7　向井 悠人

選んだトピック：⑤演劇の喜び

私はこれまでシェイクスピアの戯曲に深い関心を持ち、冬木先生の講義や演習を積極的に受講してきた。こうした演習では、まずテキストを読み、自分の解釈を発表し、その後に舞台映像を視聴して理解を深めるという形式が基本である。このような体験を通じて、今回の講義資料にあった「ひとつの共同体となって。経験を共にし、一緒に反応する。それが喜劇の素晴らしいところだ。」という言葉の意味を、鮮明に実感することができた。

中でも特に印象に残っているのが、『ハムレット』の解釈に関する演習である。私は、演劇本来の表現をテキストだけで完全に再現することが極めて難しいと考えている。というのも、役者の表情や間の取り方、セリフの抑揚といった要素が複雑に絡み合って、初めて作品としての全体像が立ち上がると感じるからである。『ハムレット』は特にテキストの行間に多くの解釈の余地があり、発表の中でも受講者それぞれの場面の解釈に違いが見られた。しかし、演劇映像を通してその差異が少しずつ埋まり、最終的には共通の理解が生まれ、一体感を持って作品を味わうことができた。

解釈の幅が生まれることは文学の魅力の一つであるが、一つの共同体となって経験を共にし、共通のビジョンを持って作品に対する解釈を議論することで、それぞれの理解をさらに深められるということを改めて実感した。そうした意味でも、⑤の文章には深く共感を覚えると同時に、これまで受講してきた演習は非常に意義深い体験であったと感じた。